

音楽科学習指導案

5年2組 藤本 佳子

1. 単元名「リズムと抑揚を意識して《蝸牛》を謡おう」

2. 研究主題

音楽的思考力を未来そうぞうの資質・能力とかがわらせて育成する音楽科の授業デザイン

(1) 単元について

指導内容：〔共通事項〕リズム、旋律（抑揚） 〔指導事項〕A表現（1）

教材：狂言《蝸牛》

子どもたちはこれまでに、わらべうたや郷土の伝統音楽（地車囃子）などの様々な日本伝統音楽を通じた学習を積み重ねてきた。本単元で扱う狂言は、ほとんどの子どもたちがはじめて出会う日本伝統音楽である。高学年となった子どもたちに、地元の伝統音楽から視野を広げ、日本の伝統音楽に親しみながらそのおもしろさを音楽表現を通して学ばせたいと考え、本単元を設定した。

【柱1：人と地域と音楽／風土・生活・文化・歴史／日本伝統音楽の歴史（狂言）】

狂言は、室町時代に生まれた日本の古典芸能の1つである。狂言は喜劇で、当時権力をにぎっていた貴族や武士、僧などを皮肉ったり世の中のニュースを取り入れたりした寸劇として、町の中で気軽に演じられていた。《蝸牛》は、ある主人が当時長生きの薬として言い伝えられていたかたつむりを太郎冠者にとってくるように命じるが、太郎冠者はかたつむりがどのようなものか知らなかったため山伏をかたつむりと間違えてしまう話である。そのような太郎冠者を山伏はからかってやろうと、囃子を囃すように言い、一緒にうたって踊り、しまいには、迎えに来た主人までもその楽しさにまきこまれてしまう。つまり、この演目は特殊で風刺はなく、だれも傷つけることのない笑いがテーマとなっており、演者も観客もだれもが楽しめる作品である。

【柱2：音楽の仕組みと技能／日本伝統音楽／リズム・旋律（抑揚）】

狂言は科白劇であるが、《蝸牛》には狂言謡という謡の部分がある。太郎冠者が山伏をかたつむりだと勘違いし「主人の家に来て欲しい」と頼むと、山伏はもったいぶって「囃子を囃してくれるなら行ってもよい」と答える。そこから、太郎冠者の「雨も風も吹かぬに、出ざかま打ち割ろう」と、山伏の「でんでんむしむし」の謡による掛け合いが繰り返される。山伏は太郎冠者をからかう楽しさと、途中からは主人の言葉によって正気にもどりかける太郎冠者をまた謡に誘い込むために、謡のリズムや抑揚を変化させていくのが特徴である。

【柱3：音楽と他媒体／総合的な表現／総合芸術（狂言）】

狂言は、日本の伝統的な総合芸術である。能舞台で演じられるため大きな舞台転換等はないが、そのかわりに、衣装や話し方（言葉の抑揚）、様々な身体の動きの型や小道具の使い方を通して観客の想像をかき立てながら楽しませるものである。

今回取り扱う謡の部分では、山伏が「でんでんむしむし」とうたう際、観客が山伏と太郎冠者の気分の変化を想像しながら楽しむことができるようリズムや抑揚などを変化させて演じられる。ま

た、ここでは山伏が「でんでんむしむし」とうたうときに「浮き」という狂言の動きの型をベースにした演者によって型にとらわれないコミカルな動きが取り入れられ、これも山伏と太郎冠者の気分の変化を想像しながら楽しむことのできる1つの要素である。

本単元では、狂言謡の抑揚やリズムに着目することで、繰り返される掛け合いのおもしろさに迫り、子どもが自らのイメージをうたって表現することができるようにしたい。そのために、抑揚やリズムだけを切り取って扱うのではなく、掛け合いのなかでそれらの特質について考えていくことができるような環境の設定をしたり、子どもの実態に応じて身体の動きも取り入れたりしていく。

(2) 単元目標・評価規準

評価の観点	単元目標・評価規準	具体の学習場面の評価規準
観点1 音楽への関心 ・意欲・態度	○抑揚とリズムに関心をもち、意欲的にうたう。	①抑揚とリズムに関心をもち、映像のうたい方を意欲的に真似してうたっている。 ②抑揚とリズムに関心をもち、変化による効果を意欲的に聴き比べている。 ★③うたい方の工夫を意欲的に考えながらうたっている。
観点2 音楽表現の 創意工夫	○抑揚とリズムについて知覚し、それが生み出す特質を感受する。 ○抑揚とリズムを意識してうたい方を工夫する。	①抑揚とリズムの変化に気づき、それらがどのような特質を生み出しているか感じ取っている。 ★②抑揚とリズムが生み出すイメージを表すために、表現を工夫している。 ★③アセスメントシートに抑揚とリズムについての知覚と感受を適切に記述している。
観点3 音楽表現の 技能	○抑揚とリズムを意識して、イメージが伝わるようにうたって表現する。	★①イメージを表すために、抑揚やリズムを変化させてうたっている。

★は主に学習成果をみるための評価規準である。

(3) 活動構成の仮説

①子どもが対象となる音や音楽に興味をもってかかわることができるよう、子ども自身が教材との関連を感じられる状況を設定することで、主体的実践力を発揮することができる。

狂言はセリフが現代語ではないことと、セリフに独特の抑揚をつけて語られることから、演目をそのまま視聴するのでは子どもにとってストーリーが理解しづらい。ストーリーが理解できなければ、狂言そのものにも興味をもってかかわることはできないし、ストーリーを意識したうたい方の工夫を考えることもできないだろう。そこで単元の導入において、あらすじを登場人物の写真を用いながら説明することで理解しやすくする。《蝸牛》は、山伏が自分をかたつむりだと勘違いした太郎冠者をからかうという単純なストーリーであることから、子どもは登場人物の気持ちや場面の様

子を想像しやすく主体的に表現の工夫を考えることができるだろう。

また、子どもが主体的に謡を比較聴取したり表現の工夫を考えたりすることができるようにするために、狂言の謡の映像に合わせて何度もうたったり、教師-子ども、子ども-子どもで何度も掛け合いをしてうたったりすることで、子どもにとって《蝸牛》が身近なものになるようにすることも有効だと考えられる。

②協働的実践力が発揮できるよう相互評価を行う場を設定することで、創造的実践力を発揮することができる。

子どもが自分たちのイメージを表すために新たな発想や構想を生み出し創造的に活動するには、単にグループで活動するだけでなく、そのグループで考えたものをグループ外の他者に評価してもらうことが効果的ではないかと考えた。そこで、ある程度グループでの考えがまとまってきた段階でペアグループによる相互評価の場を設定することにした。別のグループから感想やアドバイスを新たな手がかりにすることで、イメージを表すための新たな発想や構想が生まれるだろう。これによって、グループ内での協働にとどまらず、グループを越えた協働が可能になると考えられる。

3. 単元計画（全4時間 本時第3時）

ステップ	学習活動	時
経験	○《蝸牛》のストーリーを知り、謡の部分を視聴する。 ○謡の部分を、映像に合わせてうたう。	第1時
分析	○2通りのうたい方を比較聴取して抑揚とリズムについて知覚・感受し、うたい方の工夫への手がかりを得る。	第2時
再経験	○抑揚とリズムを意識してイメージが伝わるように謡の部分をうたう。	第3時
評価	○演奏を交流し、抑揚とリズムについてのアセスメントに答える。	第4時